

『ゆけむり史学』の歴史を顧みて

中川 祐 志

今回、『ゆけむり史学』の創刊にあたり、多くの先輩諸氏、並びに後輩諸氏のことを思い出している。

私は別府大学大学院の第三期生として入学し、現在九年目を迎えている。私が入学した当初は、院生報告会自体が存在せず、院生同士との交流も余りなく、院生全体の歓迎コンパもなかった。そのような状況の中、別府大学教授の友永先生から院生の学会に於ける発表と質問の練習、また学力向上を目的として報告会を行なったらどうかとの私信を受けたのは、一年間の台湾留学を終え、新年度を迎えようとした修士三年目のことであつたことを覚えている。それから院生報告会をどのように運営するか、また報告者の数は、報告の内容は日・東・西の各分野から一人など、具体的な方針も定まらず、行き当たりばつたりで開始されたのである。

当初は試行錯誤を繰り返しながら行なわれた院生報告会も、現在熊本大学大学院生の黒木君、広島大学大学院生の津坂君、専修大学助手の内田君などが中心となつて院生報告会を運営することで安定し、現在の院生報告会の基礎を形成させてきた。その流れを踏襲して、後輩で既に卒業生ではあるが、真弓君などが中心となつて報告会を運営し、現在では月一回のペースで行なわれるほど、活発に行なわれている。

これはひとえに院生諸氏が弛まぬ努力をしてきた結果ではあるが、土曜日に行なわれる院生報告会に、休日にも拘わらず足を運ばれ、院生の報告に親身に質問をしていただける先生がたの存在があればこそその結果であると思われる。分野・時代は異なつても、先生がたのすばらしい識見と歴史的素養を、院生の報告に質問、または指導という形式により院生の歴史観を育成され、その啓発により多くの卒業生が輩出し、各方面で活躍をされているのも、院生報告会での活動があればこそであると思われる。また他の大学での学会、または各専門分野の当該史などの学会に参加しても、報告者の報告に対して臆することなく、内容を咀嚼することができるとも、院生報告会が当初に目的とした内容を十分に達成していると思われる。

以上の如く、院生報告会の第一義の目的は達成されつつある。しかるに今後は、他の大学院生との交流、または学部生などの人々との学問的交流をも活発にする必要があると思われる。この度の『ゆけむり史学』の創刊により、私達の研究内容とその成果を公的に発表し、その活動を衆知していた。だくことにより、多数の諸氏との交流が望めるであろうと考えられる。また多くの大学院生を迎えることにより、益々の学問的發展と、現在重視されている地方大学の展開を目指すことができると考えられてならない。

今回、『ゆけむり史学』創刊にあたり、一年間の準備期間を経て、発行まで行き着いた準備委員会の方々の御苦勞は推察しても余りある。今後は、後輩諸氏が先輩の苦勞を引き継ぎ、来年、再来年と巻

数を増やし、途切れることがないことを祈るし、また巻数の増加とともに、別府大学大学院の光輝ある歴史と伝統が続くことを願うものである。